

巻 頭 言

精神文化学会 会長
近藤 剛

かつては井戸端会議やトイレの落書きなどで巷間を賑わせた〈噂話〉が、世界を滅ぼしにかかっている。〈噂話〉とは真偽が定かではない風評の類であるが、今日のデジタル社会では SNS を中心として、絶え間なく再生産され続け、急速に世界に広まり、強大な影響力をおよぼしている。その内容が過激であればあるほど、センセーションを巻き起こし、広大に拡散されていく。憶測、虚偽、妄想、悪意、陰謀論が大量に垂れ流されており、事実を歪めている。私たちにとってのファクトとは、自分にとって都合の良いことを意味しており、そうでないものは全てフェイクであると一蹴される。そのような SNS の使用は問題であるから、直ちに規制されるべきだという議論もあるが、誰がどのような立場で管理、監督、看視するというのだろうか。従来のメディアが適切に扱わないような問題を糾弾し、正攻法では打破できないような壁を打ち破ろうとすれば、多少は荒っぽい手法に訴えざるを得ず、一見すると非常識で下品に映るインフルエンサーやユーチューバーなどの、言わばトリックスターのような役割も認められるのかもしれない。しかし、私たちを取り囲む情報空間は異様であり、このようなトレンドはカオスを招くのみならず、生の虚無化を帰結するのであり、今後どのように克服していくのか、真摯に考えねばならない。

私見によれば、情報を伝達する媒体に制限をかけたり、表現の在り方に規制を設けたりすることには慎重であるべきだと考える。その時の勢いで安易な（無思慮な）規制論を容認してしまうと、言論の自由や表現の自由が束縛されるおそれがあるからである。結局のところ、情報を受け取る側の理解、認識の如何が問われているのであり、問題の本質は「大衆論」にあると思われる。筆者は『尚古の思想』で大衆批判を展開しているので、その議論をここで繰り返そうとは思わないが、一言だけ述べるならば、情報洪水に流されて、嬉々として煽動され、感情の起伏のままに行動する大

2 精神文化学研究[第 8 号]

衆の性質こそ、最も反省されるべき点であろう。目下、私たちは大衆であることを克服することが求められている。私たちが良識的な国民であることを取り戻さねば、健全な未来はやって来ない。

真偽を峻別するためには、合理的な判断を可能にする考察力と、それを支える豊かな知識量、自由闊達に進められる議論、さらに人間としての良心が求められており、本会では、そのような鍛錬を基本的な方針として掲げ、活動を行ってきている。私たちの活動は、大衆からの脱却を目指すとともに、現代社会を強靱に生き抜く力を育んでいると自負している。したがって、これからも歩みを止めたりしない。

真偽を峻別するための判断根拠とは何なのかと思案する時、ある人の言葉が思い出される。本会を長く支え、私たちに貴重な示唆を与え続けた故永松道晴理事（2024年7月21日、急性敗血症にてご逝去、享年84歳）は「いい加減」という「common sense（常識）」への帰還を説いておられた。ここに謹んで引用させていただく。「人間は非合理的な illogical 動物であり、生きて行くためには時に応じて己を捨てて妥協することをよしとする、親子・夫婦の間では日常的に行われていて家族の分裂や離婚を抑止している、つまり「いい加減」で、左右に分断して争うより中間で手を打つ人間の知恵が個人や家族・友人の間では一般的に許されています。これがビジネスという戦場でも私が戦死せずに今日まで生き延びて来られた理由でしょう。「いい加減」を英語に訳すとすれば、私は common sense（常識）としたい。価値判断の含まれた正義ではなく、富とか地位の埒外に存在する誠義（まこと）がヒトを動かす世界、それはまた、デジタル化が行きついた先に帰還すべきアナログの世界でもあります」（永松道晴（2024年）「ビジネスは武器を使わない戦争—私の歩んできた戦場から日本の将来を望む—」『精神文化学研究』第7号、116頁）。この遺訓を刻みたい。

私たちは「誠義」を心中深くに抱き、common sense に内蔵された「いい加減」の知恵を用い、平衡感覚を保持し、ど真ん中を堂々と歩いていけばよい。そして、この支離滅裂で滅茶苦茶な喧噪をやり過ぎたいと思う。決して巻き込まれてはならない。そのための修練を怠りなく行うため、本会は益々その活動を活発化していく。会員諸氏のご協力を仰ぎたい。